

---

# とある魔術と仮面使い

komui

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある魔術と仮面使い

### 【コード】

N7507U

### 【作者名】

komui

### 【あらすじ】

これはペルソナ4の主人公が上条と共に事件を解決する物語。  
名前は漫画版です

元々別の所で書いていたやつです。

色々修正はしていますが大筋は変わっていません

## 序章 瀬田総司

「ふう、また休みに来るって言うても……やっぱりさびしいな……」

何せ一年共に過ごした仲間たちと別れるんだ、寂しくないはずがないしな……。

あいつらも同じ気持ちだろうか……。

「でもまあ、あいつらなら、すぐに元気になりそうだけどな、はは」

そつだ、あいつらならきつと、自分のやるべきことに向けてすぐに頑張るだろう。

なに、アメノサギリは倒したんだ。

これで事件も全て終わった。

シャドウも暴走することは無いだろうし、霧ももう出てこないだろう。

皆が皆、解決したんだ。

「皆で頑張ったかいがあったな……」

感慨深げに息をついてしまう。

やるべきことは全部やったから、安堵として出てきたんだろう。

ああ……電車の揺れで眠くなってきた。

なんだか……急に意識が……

まり

第一章

始まりの始

## 出会い（前書き）

元々は別のサイトで書いていたものです。  
復活させただけなので更新は未定。  
とりあえずあるものだけ投稿します。

## 出会い

腹部への圧迫と、声で目が覚める。

「……………ん？ どこだこころ？」

何があったのか、と、状況を確認するために周りを見る。すると何故か自分はベランダに引っ掛かって寝ていた。そして目の前にはそんな自分に引いているツンツン頭の男。

「あのー……………どちら様ですか？」

そいつはそう声をかけてきた。

……………おかしい。

俺は確か皆に見送られて電車の中にいたはず。

そして電車の揺れに眠気が誘われ少し寝たら

何故かこの

ありさまだ。

……………とりあえず考えるの後だ、目の前の男に今すぐ返事しなければ通報されそうな雰囲気だ。

「えっと……………俺は瀬多総司って言っただ。よろしく」

「あつ、えつ、と……………か、上条当麻って言います って

何でいきなり自己紹介!？」

……………なんか目の前の男が余計混乱してるように見えるんだが気のせいかな？

なんか「また変なのが引っ掛かってるー!!」 上条さん家のベラ

ンダはそんなに寝やすいですかー!!」

なんて叫んでいる。

言葉から察するに初めてではないというのか  
ある意味恐ろしい。

しかし、名前は分かった、上条という名前だな。

「えっと、上条。俺は別に怪しいものじゃない、気付いたらここに居ただけだ」

そう言つと、目の前に居た上条が急に目の色を変えた。

「えっと、最近の事件に巻き込まれたタイプかお前？」

なんて言ってくる、なんだ？ 最近の事件って。

「最近の事件は知らないけど、何らかの事件に巻き込まれたのは間違いないと思う、何で俺がここに居るのか分からないしな」

そついうと、目の前の上条と言う男は怪訝な顔をして。

「じゃあ中八九最近のやつに巻き込まれたタイプみたいだな」

なんて言う。だから、最近のってなんだ？

自分だけ置いて勝手に考え込まれるのは苦手だ。

「なあ、最近の事件ってなんだ？」

俺は少し真面目な顔で聞いてみる。

すると、上条は急に噴き出した。なんだ？ 失礼な男だ。

俺が不機嫌な顔をしたのが分かったのか上条が慌てて少し笑いながら言う。

「いやいや、だってベランダに引つ掛かった状態で真剣な顔されたら、流石の上条さんでも笑いますよ？」

そう言うって、上条は人がいいのか俺を部屋の中に招き入れてくれた。

まあ招き入れてくれなければここから出ていくのも叶わないんだけどな。

そして、俺は上条に部屋に入るよう言われ、その言葉に従い中に入ると、

ベットに白いシスターが寝ていた。

「えっと……」

もしかしてロリコンの方が？

とか一瞬脳裏に浮かんだが、とたんに上条が

「ちょっと待て！ 俺はロリコンとかそういうのじゃないからな

！？ こいつも前にお前と一緒にベランダで寝てたやつだ」

そう叫ぶ。

いや、何も言っていないんだが。しかし、

「このシスター、ここに住んでいるように見えるんだが気のせい  
か？」

そう言うつと上条は「うっ」と顔が青白くなる。



そして、どもりながら俺に言う

「い、色々あったんですよ、色々！ だから上条さんをロリコンの変態だなんて思わないでください！！！」

上条は急に土下座してきた。

おねげーしますおねげーします、と、何度も頭を下げてくる。

なんだか人の家に押し入って利子を払えという、ヤクザになった気分だ。

まあこいつが正直ロリコンでなくてもあってもどうでもいいのだが……。

そうであるなら通報するだけだ。

まあそんな余分なことは置いておいて、

「えっと、本題に入ってもいいかな？ 上条？」

「ああはいはい、ってなんで今さらだけど、さっきから何で俺の名前知ってたんだ？」

「さっきの土下座とベランダで大きな独り言で叫んでたから」

「ああ……」

何故か若干上条から哀愁が漂った気がしたが、まあどうでもいい。

「で、最近の事件ってなんだ？」

「……ああ最近の事件な、ええっと瀬田だっけ？」

「総司で良い」

「じゃあ総司、」

そう上条が一旦区切りことう口を開く。

真夜中テレビって知ってるか？

「な……」

上条はなんて言った？

「その顔は知ってるみたいだな？ その真夜中テレビってのが最近この学園都市で事件を起してるらしいんだ」

真夜中テレビだと？

ありえない。あの事件はもう解決した。  
そう驚愕しているよ、

急に目の前が、見覚えがありすぎる車の中になった。

「おやおや、これは珍しい。また貴方が来るとは、想像だにしま  
せんでした」

「あら、また来れたのね貴方」

そして、見覚えのありすぎる、イゴールとマーガレットの両名。

なんだこれは。

「ふむ、混乱するのも無理ありませんな。何せ終わったと思った  
出来事に区切りがついていなかったのですから」

終わっていなかった？

「ええ、貴方はまだ最後の敵を倒していないわ」

そんな馬鹿なアメノサギリは確かに倒したは

「いえ、あれが真犯人ではないわ、おかしいと思わなかった？  
貴方だけ特別なペルソナが使えたこと」

コマンド選択

？それは俺が特別だから

？まさか……

選択肢、？に決定。

それは俺が特別だからじゃ……。

「違うわ」

何やらマーガレットのコミュニティのランクが下がったようだ。  
しかし、なら何が……。

「それは自分で見つけるべきなのですよ愚者よ」

そう、イゴールが言う。

しかし、分からないものは分からない。  
だから、こうなってしまった。

「ふむ、確かにそれも一理ありますね」

イゴールは長い鼻を触りながら少し考え。

「……なら、ヒントをあげましょう。それで解決できなければもはやそれは貴方の責任です」

分かった、自分のケツは自分の手で拭いてやる、そう、あの事件の真相に気付けなかったのは俺のせいだ。

だから、ヒントを貰って何もできなければ、それは全て俺のせいだ。

そう言うといゴールは、少し嬉しそうに笑い。

「貴方様ならそう言うと思っておりました。

では、勇敢なるものよ、私からヒントあげましょう。

それは

目の前が元の風景に戻る。

「でな？ 真夜中テレビでテレビに映ったものはどこかに飛ばされるらしいんだ。

そして最近失踪者が増えてる傾向にあるらしい」

そう、上条が喋っている。どうやら戻ってきたようだ。

「て、どうした？ 総司、顔色が悪いみたいだぞ？」

「いや、大丈夫だ。」

「そうか？」

「ああ それより上条、その話少し少しかしくないか？」

「ん？ どこがでせうか？」

なんだろう、せうって。

「いや、その失踪者、恐らく帰ってきてないだろう？」

そう言っていると、上条は、はっとして気付いた。

出会い(後書き)

君の見る真実は！

## 疑いのまなざし

俺が上条に失踪者の胸を伝えると、上条も頭を傾げる。

「そういえばそうだったな、でもあれ？　なんでそんなこと知ってるんだ総司は？」

上条さんに聞いてくるほどなの？」

「まあ……これは、俺の責任だからな」

なんて口を滑らしてしまった。

すると上条が目つきを変えたのが分かる。

俺に何か得体の知れないものを感じてるのかもしれないな。

「……なんで、お前の責任なんだ総司？」

上条が、わずかながらに警戒しながら聞いてくる。

「それは……」

これは話してもいいことなのだろうか？

ここまで言っておいてあれだが上条が正義感の強い奴なら事件に介入して巻き込む可能性がある。

しかし、まず信じるような話でもないだろうし。

なんて少し逡巡していると、上条が口を開く。

「三か月前、この真夜中テレビの噂が広まってから失踪者が後を絶たない、たしかもう、12人目だテレビのニュースにもなった。

それに……俺の学校の奴も、一人消えているらしい」



「なに！？ もうそんなにも失踪してるのか！？」

ペースが速すぎる、もうそんなにも失踪していたなんて、それに、確かにそれだけ失踪すれば、テレビに取り上げられるだろう。

何せ3カ月で12人だ。

それに上条の学校の人間が消えている。

それは確かに、気になるだろう。

しかし、まだ俺は質問を続けなければ、きかなければいけない。

「その失踪者のうち何人が帰ってきた？」

「総司の言っていた通り、まだ誰も帰ってきていない」

なら、たぶんその12人はすでにシャドウに……。

それに、3か月前。

……アメノサギリを倒した後か？

そう考えていると、上条は言う。

「なあ、総司。お前が何者なのかは聞かない、が、この事件の全貌を知ってるんだな？」

だませる雰囲気ではない事を悟った俺は仕方なく頷く。  
すると上条は、真剣な顔で、俺に聞いて来る。

「なら、いったい何が起きているんだ？ ……あとなんでベランダに居たんだ？」

「いや、後者の方は知らないんだが……、前者のことを話すとな

ると少し長くなる」

「別にかまわねえ、教えてくれ」

なら、まずあれから話さなければいけない。

「ペルソナって分かるか？」

「ペルソナって……確か小萌先生の授業で聞いた……確か心理学のやつか？」

そう上条が言う。

確かに、間違いではないけど、それとは違う。

これは、おのれの仮面を現世に表す術だ。

「確かに間違いではないと思う、でも俺達……いや、俺の知っているペルソナと上条の知っているペルソナは違う」

そう言つと、上条は首を横に傾げ困つたような声を出す

「えっと……つまりどういう意味でせうか？」

「つまり　　こういう意味だ」

俺は手の上にカードを出現させ、強引に握りつぶす。

すると、カードから、力の奔流が巻き起こる。

恐らく、封じ込まれていたものが、破壊され解放されるためである。

「出てこい　　イザナギー!!」

激しい風と共に出現するは人間大の大きさの神、その名はイザナギ。

日本神話の天照やスサノオをイザナミとともに産んだ  
みの神である。 国生

そいつが、俺の目の前に現れる。

「うおわ!!」

上条は情けなく大きな声をあげて仰け反っている。

まあ驚くのも無理はないだろうな。  
とりあえず、落ちつかせるか、

「これが俺の知るペルソナだ」

そう俺が言うと、上条は目を白黒させながらも、

「総司、お前魔術師だったのか？」

確かに一般人からしたら魔法のように見えるかも知れないが全然違う。

そう言おうとしたら少女の声が割り込んできた。

「当麻、あれは魔術とは少し、違うかも」

「て、インデックス起きてたのか!？」

そう上条が言うとインデックスという名の少女は上条に向けて呆れた声で。

「流石にあれだけ騒がれると誰でも起きちゃっと思っただけど…  
…。  
あれで当麻は寝ている自身でもあるの?」

「いや、流石に上条さんでもあの強風の中で寝ていることはできないですよ」

そう上条が言うと言うとインデックスと言う少女は「でしょ?」  
と可愛らしく言い。

そしてこちらに顔を向けてきた。

しかし、ペルソナや今回の事件に関わっているものがどういうものかを知れば流石に手を引くかと思っただけで…予想以上に反応が薄い、しかもこの少女は驚きもしない。

「で、貴方は何者なのかな? これ、魔術ではないのは分かるんだけど、でも魔術のようなものであるのは間違いないかも」

そう目の前のインデックスという少女が首を傾げて言う。

それに上条は、

「インデックスでも分からないのか?」

「うん、あれは私の頭の中の本棚にもない魔術みたい」

「そうなのか? インデックスの記憶にもないなんてそりゃ、  
どんな魔術だよ?」

「それが分からないから、そこの当麻と違ってクールそうな男の

人に聞いてるんだよ！」

「なっ!?!? こんなクールビューティーを置いて何を言いますかこの大食いシスター！」

「誰かが困っていると居ても立っていられず助けに行く当麻がクールなんて言えるわけないんだよ!?!」

「う……それをいわれると……」

と、上条とインデックスは仲良さそうに喧嘩し、自分を置いてそんなやり取りをした後、俺に声を合わせてこう言った。

『で、お前は（貴方は）何者なんだ？（何者なの）？』

どう言えばいいのだろうか？ 自称特別捜査隊？  
違うな……どちらかと言えば団体名だし、それにこれじゃあ何も  
解決しない。

しかし、それ以外に言いようもないし……。

正義の味方？

……なんか違う気がする。

ジユネ……ゴホンゴホン、いや、花村ならそう言いそうだけど、  
なんか違う。

なんだろうな……？

と、俺の考えている時間が長かったのか、インデックスが  
不思議そうに声をかけてくる。

「そんなに考え込んでどうしたの？」

ふむ、先ほどベランダで、自分だけ置いて勝手に考え込まれるの  
は苦手だとは思ったが自分も周りを置いてけぼりで考えていたらし  
い。

少し、改めないとな。

そして、俺はたぶん一番正しい言葉をインデックスに投げかける。

「いや、何者か、と言われるとよく分からないと言った方が正し  
いかな？」

そう言つと上条は眉をひそめ心配げに声をかけてくる。

「自分の記憶でも曖昧なのか？」

「いや、記憶はちゃんとある。ただ『正義の味方をやっていました』なんて言つとあまりにも陳腐だし、なんて言えばいいのか分からないんだ」

『正義の味方？』

俺の言葉に反応したインデックスと上条の声が重なった。

「いや正義の味方、とは言い難いんだけど、ペルソナを使って人助けをしていただけだ」

そう言つと上条は一つ疑問を投げかけてくる。

「へえ……  
て、もしかしてそれって真夜中テレビと関係あるのか？」

上条はどうやら勘が冴えてる奴らしい。

「ああ、この力で真夜中テレビ。つまりテレビの中に入って人を救っていたんだ」

そう言つとインデックスが大きな声で目をランランと輝かして俺にのしかかるようにして言ってくる。

「ねえねえ、総司は正義の味方なんだよね！？ そのペルソナの手を使えば正義の味方コミュニティみたいなのでマジカルカナミン

に会えたりするのかな!? かな!?!」  
のしかかってくるように喋るインデックスを上条は静止するように注意する。

「て、ちょっと待ちなさいインデックスさん!! そんながつつかなくても……」

「だって、テレビの中に入れるんだよ!? 当麻は気にならないの!?!」

「いや、ていつか……なあ総司、テレビの中に入れるなんて冗談ですよ?」

上条の意見ももつともだ、むしろ簡単に信じるインデックスの方がおかしいのだ。

とりあえず、耳で聞くより目で見た方が速い、俺は上条にテレビに手を入れながら言う。

「いや、ホントだ」

そう言ってテレビに腕を突っ込む。

普通に腕がテレビを通り抜けた。

「て、うわぁ! 上条さんちのテレビが貫通してますよ!?!」

「ほらほら、当麻!! やっぱリカナミンに会えるんだよ!!! すごいんだよ! 未知の魔術なんだよ!!!」

そう、なにやらインデックスは過剰に俺の能力に期待している。が、流石にそこまでは無理だ。



「いや、正直期待を裏切るようで悪いんだけど、そういうのとは違うよ」「

「そうなの？」

そう言ってインデックスは首をかしげる。  
それに俺はちよっと苦っ笑して

「ああ、そういうテレビの中の存在と会えるというわけじゃない」

そう言うと、インデックスは露骨に落ち込んだ。

本気であると思っていただけにショックも大きかったのである  
う。

何か悪い事をした訳じゃないんだけど、悪い事した気分になる。  
そう考えていると、上条が眉間に眉を寄せ、疑問を言う。

「なあ、それって俺の右手が触れるとどうなるんだ？」

そう、上条は言った。

## 能力

「右手？」

上条が、自分の右手を俺に見せながら言った。  
なのでそう聞くと、一つ頷き返答してきた。

「ああ、俺の右手は少し特別なんだ。幻想殺しって言うんだよ」

幻想殺し？ 初めて聞く名だな……。

## 選択肢

1 それは思春期の男子の幻想でも殺せるのか？

2 何だそれ？

1 「思春期の男子の幻想でも殺せるのか？」

そう言つと上条は「ええ……」なんて声を出して少し呆れたようだった。

「いや、そんな健全な男子の幻想を打ち砕くほど上条さんは非情じゃないですよ？」

それに上条さんの幻想も壊れるのでぜひともやめていただきたい」

そう言つて、上条はおどけた風に言う。

まあ流石に少しふざけてしまった。

俺はこんどは真面目に右手のことを聞くと、上条は説明してくれた。

「俺の右手はそれがい異能であればそれが神の軌跡であろうと何だろうと打ち消すことができるんだ」

そう上条が言う、しかし、神の軌跡も打ち消せるだなんて胡散臭いにもほどがある、まあ自分も大概そうだが。

「それは本当に神の軌跡でも打ち消せるのか？ 試してみたのかな？」

そう言つと、上条は少し考え。

「それはよく分からないな……俺も自分ではどこまで通用するのかわからないし……、でも何でそんなこと聞くんだけ？」

「いや、それは……」「たぶん総司の敵はは神様だからじゃないのかな？」

落ち込んでいたインデックスが俺の言葉に割り込んできた。

そして、その的の射た答えに、俺は驚く。  
同様に上条も驚き、声を出した。

「はあ？ インデックスさん、流石にそれは無いんじゃないかとおもいますよ？ それに神様だったらもっと派手にするんじゃないのか？」

そう上条はインデックスの言葉に対して言う。  
すると、インデックスが上条にまるで出来の悪い教え子に教えるように少し胸を張って丁寧に説明を始めた。

「でもね？ さっきの総司が出したペルソナというのは姿形は神話とは違うけど、今の日本に則した格好で現れた日本神話のイザナギだったんだよ、本当にあり得ないことにね。」

それに神様に色々いるんだよ当麻？ 邪神で例えるならネロだね。彼は十字教では悪魔として扱われるんだけどでも北欧神話ではたまに英雄として扱われていたりするの。

だから今回もそういう神様の気まぐれなんじゃないかな？」

さっきから思うがこのインデックスと言う少女は何者なのだろう、ペルソナに驚かなかつたり俺のペルソナを見抜いたり。

魔術を変に知っていたり。

それに……敵の正体も間違いではない。アメノサギリも確かに神様だった。

しかし、彼女の言葉に訂正しておくことがある。

「いや、あれは確かにイザナギだが本物とは少し違う、あれは俺の仮面の一つだ」

「仮面の一つ?」

インデックスが疑問符を頭に浮かべる。

俺は説明する。

「ペルソナであって、<sup>ペルソナ</sup>仮面なんだ。つまり、アレは俺の心の一部、心理学でのペルソナの実体化なんだ」

それが何故神様の形をとるのは分からないけれどもとも付け足しておいた。

そう言うつと、インデックスは納得したように頷く。

そして上条も納得したのか、

「なるほど、ならそいつ自身に一番合ったペルソナが出てくるわけだ」

そう言うつ。

それに俺も頷き

「たぶんそうだと思う」

そう言うつと上条は満足して頷いた。

しかし、インデックスが一つの疑問を口にする。

「でもそれとテレビの関係は何なんだろうね?」

「……それは分からない」

流石にそれは分からない、ペルソナの力だとしても、何故テレビ

に入れるかも分からないのに。  
すると上条は話を戻す。

「なあ、それで俺の右手で触るとどうなるんだ？」

確かそんな話をしていたなあと思い出す。

そして俺は上条を見て言う。

「俺が手を入れるから上条はその後に触ってみてくれ」

そう言つと上条は少し焦つたように。

「あ、でもその場合お前の手はどうなるんだよ？」

「テレビを貫通するんじゃないかな？」

そう淡々と言つと上条は上条さんちのテレビが とか、でも他じやできなし、とか最後に不幸だ とか叫びだした。

……上条は大きな声で叫ぶのが癖なのだろうか？

そしてしばらくしたのち、上条は仕方ないと諦めた声を出した。

「……よし、総司、手を入れてくれ」

「分かった」

俺は上条に即され手を入れる。

俺の手は見事にテレビに波紋を浮かばせながら貫通し、上条の右手は。

見事に貫通した。

これで、このテレビはただの『神秘』などという言葉では片づけられなくなったようだ。

そんな考えをよそに、インデックスは首を傾げる。

「でも……どうみても異能のそれに見えるんだけど、どうなってるのかな？」

……………もしかして……………」

「どうしたんだインデックス？ 何か分かったのか？」

上条がそう聞くとインデックスは言う。

「あくまでこれは仮説なんだけど……………。このテレビは扉なんじゃないかな？」

「扉？」

「うん、たぶんその神様が使った力は最初だけで、自然現象として世界と世界をくっつけて一つの扉にしちゃったのかも、その扉は異能とかじゃなくて、あくまで自然現象としての力が働いてるんじゃないかな？」

たぶんこの向こうには別の世界があって、たぶんこことは違う世界なのかも？ 違うかな？ 総司？」

そうインデックスが仮説を立てる。

「前半の部分は分からないけど……………向こう側は違う世界で同じ世



界、見た目はこの世界と同じ、霧に包まれた世界だった」

そう言うつとインデックスは納得したように頷く。

「たぶん世界の裏側と繋がっているんだね、人間だと自然現象として世界の裏側との扉を繋げることなんてできっこないんだけど、神様ならできるのかも、それに世界の裏側の方が並行世界とかと違って繋げやすいんだと思う」

正直インデックスが何を言っているのかはよく分からないんだけど、このことがオカルトに強いのは分かった。

しかし、上条は別の疑問を立てる。

「なら、そのペルソナ使いつてのとしか入れないのはなんでなんだ？」

「それはたぶん扉の鍵なんじゃないかな？」

『鍵？』

そう俺と上条は声をそろえた。

## 能力（後書き）

無理やりな設定でスイマセン

上条テレビに入れるにはちよいと強引にでもしないとイケないので

……

とりあえず自然現象「ワラキアの夜的な解釈でお願いします自然現象なので破壊されたり殺されたり死んだりする概念が無いからという感じでお願ひします

## 君の答え

「うん鍵なんだよ。当麻だけだとテレビに手が入るわけないでしょ？」

そうインデックスが言うと上条は頷く。

「だからペルソナ、総司の言う心理学でいうと、一種の精神の解放とも言えるのかな？ その結果がペルソナなんだと思うの、だからそれが扉を開ける鍵なんだと思うんだよ」

俺はそのインデックスの解釈になるほど、と納得する。確かにそれだと足立や生田目それに俺たちが入れたわけも……。

「あれ？」

つい、声をあげてしまった。

「どうしたの？」

「どうしたんだ？」

上条とインデックスが不思議そうに声をかけてくる。

しかし、それを置いてでも自分の思考にはいつてしまう。

いや、しかし、でも、……でも、何故生田目はテレビの世界に、自分以外の人間を入れられたんだ？ 彼のペルソナは不完全もいいところだった。それどころか、彼はシャドウ事態に……。

俺は花村や直人たち仲間たちと同様に変貌したものだともう疑

わなかった。

しかし、足立は……確かにペルソナを使っていた。  
……兆しがあれば……何かがあれば入れるのか？

そこで、イゴールのヒントを思い出す。

それは、あの車の中での話、ヒントのことだ。

『始まりの第一歩、思惑、愚者に集いしアルカナ、そして……いつもと同じように考えなさい。それが私がだせる限界のヒントです』

いつもと同じ？

『はい、そうでございます。それでは、貴方のご武運を、私目は祈っております』

そうイゴールは言っていた。

始まりの第一歩、そこに何かがあるのだろう。

しかし、思惑に、愚者に集いしアルカナ……そしていつもと同じように考えろ？

どういう意味だ？

俺が考え込んでいると、上条に少し怒気の孕んでいるような声をかけられ、俺はまた周りを置いて考え込んでいたことに気付いた。

顔を上げ、上条の顔を見ると怒ったような顔で、

「なあ総司、ここまでお前が見せてきたのは本物だった。だから俺はもうお前の言うことを疑わないけどさ。

でもな、この事件は真夜中テレビなんて言う陳腐な名前だけど、大きな事件なんだ。

たぶん、一人で考えていたなら解決できないほどの神様なんてのが関係してくる事件なんだろう？

だったらさ、俺たちを置いて考え込むなよ！

ここまで来たら俺たちは他人なんて言えない！ 仲間だ！！

もし俺たちが信用できないなら俺たちのことも全て話す、だから、お前の経験したことも俺たちに話してくれ！」

そう、上条は熱く、まるで自分から周りを照らすかのように、輝

くよつに言った。  
俺はそれに、頷いた。

すると、急に周りの世界が、止まる。

見覚えのある光景だ。これは確か……。  
すると、予想通り目の前にカードが現れる。

それは

太陽のアルカナ

それが、俺の目の前に現れた。

『上条当麻との絆ができた』

俺はカードを握り、胸元に持っていくとカードは消える。

ここに来て初めてのコミュニティ。

俺は少し、花村のことを思い出して、少し思い出し笑いをしてしまった。

38

そしてまた世界は動き出し、目の前の上条が動き出す。

「ん？ どうした？」

「いや、なんでもない、ただ、少し昔、のことを思い出していたんだ」

「ん？ そうか？」

上条は心配するも大丈夫だと返事する。

そして、俺は思う、上条はここまで言ってくれているんだ俺も…

…言わなければならぬ

「上条当麻！」

俺は少し声を大きく上条に言う。

「出会ったばかりで、しかもブランドなんか引掛かっていた俺なんかのためにそこまで言ってくれてありがとう」

上条は俺のことばに一瞬驚きつつも頷き、「ああ」と一言言った。俺はもう一度ありがとうと言い、握手する。

そして、互いに、笑いあった。

すると、上条のすぐ隣にいるインデックスは可愛らしくリスミタいに頬を膨らまし。

「むー私を無視して盛り上がられるとちょっと疎外感を感じるかも」

とインデックスは可愛らしく拗ねた。

そして続けて。

「それにとうまだけじゃなくて私も手伝うんだからね！」

と言い放ち、フンと鼻を鳴らして腕を組む。

それに俺は妙に詳しいオカルト面でサポートでもするのかな？と苦笑いしながら頭をなでる。



インデックスは「子供扱いしてほしくないかも」なんて言いながら顔を少し赤らめながらまた頬を膨らませる。

拗ねかたがちよっと菜々子に似ていて可愛いと思った今日この頃だった。

## 自己紹介（真）

「それじゃあ俺が何をしてきたか、上条に教えておく」

そうして俺は上条に何をしてきたか話した。

一年前、親の都合で田舎の学校に転校したこと、そこでできた友達と真夜中テレビを見たこと。

そこに映っていたのが今では親友の、その親友の好きな人が映っていたこと。

その映っていた人が次の日変死体で上がっていたこと。そして真夜中テレビに入ったこと、そこでペルソナの覚醒、仲間が自分の心を否定しシャドウが生まれたこと、

と、特別捜査隊の結成から仲間のこと、それに生田目や足達アメノサギリのことまで事細かに俺は話した。

それを最後まで質問せず大人しく聞いていた上条達は、

「（ぽかーん）」

「（ぽかーん）」

上条とインデックスはポカンとなっていた。

む、あそこまで自分のこととペルソナのことを話していたんだから別にそこまでポカンとなるほどでもないと思うが……。

そう思っていると、いち早く立ち直った上条が俺に質問を投げかける。

「えっと……まあ色々質問したいことがあるんだが一つ聞かせてくれ」

「ああ」

「お前学園都市の外から来たのか？」

「……学園都市？」

上条は何を言っているんだ？ そう質問しようとするのと、インデックスも立ち直ったのか、俺に質問する。

「アメノサギリって、日本神話の霧の神様だよな？ それを倒しちゃったの？」

「ああ、かなり強かった。正直何度か死にそうになったけど、仲間たちと一緒に倒した」

そう言っているとインデックスは目を見張る。そんなにおかしなことを言っただろうか？

ペルソナが神様のそれと似ているのだからそんなに驚くほどでもないと思うのだが。

上条はよく分からないことを言うし、インデックスも何をそんなに驚いて言うんだ？

そう思っていると上条は立ち上がり窓の外を指さす。

「なあ総司、外のをあれを見てどう思う？」

そう上条に言われ、俺は言われるがまま窓の外を見てみた。

「なんだこれは……」

上条に言われるがまま見た外の世界は、あまりにも、俺の居た場所とは違う場所だった。

とうよりここは……。

「……ここは学園都市だ」

テレビで学園都市の大覇制覇祭を見たことがある。

その大覇制覇祭のヘリコプターからの中継で見た空からの光景がダブって今の俺の目の前に広がっていた。

「なあ総司？」

上条が言う。

「お前本当にどうやってきたんだ？」

分からない、ベランダに引っ掛かっていたのも分からないが、本気で場所がおかしすぎる、電車の中からこの場所への距離なんてありすぎる。

だから俺は上条に言う「何も分からない」と。

上条はそうか、と言うと。

「なら明日この学園都市を案内してやる、その調子だと家にも帰る方法が無いんだろうし、無理やりここから出る方法も無いからな……まあそれなら家もここを使え。」

さっき言っただろ？ 俺たちは仲間だ。

それに今更居候が一人増えても上条さんの家は何も変わらりませ  
ん……」

そう上条は笑顔で言った。

何故か後半は声小さくなっていたがどうしたんだろっか？

まあそこはあまり聞いてやらないでやろうと思いつながら、俺は先  
ほどの上条のアルカナを思い出した。

太陽のアルカナ。

確かに上条には会っていると思う、にじみ出る心の温かさが太陽  
のように心地いい。

そして俺は上条からも話を聞き、そうしてまとめるところになった。

上条は本物の魔術師と戦っていたことやインデックスが10万3  
000冊の魔導書を頭に入れている絶対記憶能力者など上条の苦労  
話など色々なことを聞きそして

夜になった。

確かさっき俺はこう思った。

にじみ出る心の温かさが太陽のように心地いい。

しかし俺は人間と言つのが心だけでは生きていけないのだと悟つた。

今夜の夜ごはんはモヤシと特売の卵だけだった。

ひもじ過ぎて死ぬかと思った。

## 新しき世界（前書き）

今更主人公パラメーター

パラメーターは

「勇気、豪傑」「根気、半端ない」「寛容さ、オカン級」  
「伝達力、言霊使い」「知識、生き字引」です。

## 新しき世界

翌日、上条は約束通り学園都市を一通り案内してくれることになった。

スキルアウトという不良の出やすい場所や、コンビニ、ファミレスの場所、家までの近道などそれはもう色々教えてもらい、一通り案内し終わった上条は近場の公園で休もうと言うので休むことになった。

「これで、一通り案内し終わったな」

とりあえず休憩のため椅子に座ると、俺と上条の間に座っているインデックスが昨日の夜も散々言っていた

「とうまーお腹すいたかも」

と上条に訴えかける。

が、

「でも総司、流石にここら辺のことは一回じゃ覚え切れないだろ？」

そのインデックスの訴えを華麗にスル　して上条は聞いてくる。しかしまあ、そうでもないのだ。

「いや、一応全部覚えた」

そう言うと、上条は大げさに驚いた。



「マジですか！？ここに天才がいますよ！？」

「そんな変なことでもないよ、真夜中テレビの中は迷路みたいだったから自然と道を覚えるようになったんだ。それにシャドウも出てくるから体も鍛えられた」

そう言うと上条は感心したような声を出し「お前も苦勞したんだな」と言ってくる。

「お腹すいたんだよ」

俺は「まあ上条ほどでもないよ」と言っておいた。

上条みたいにそんなに沢山死にかけてないし……いや、それなりに危ない部分もあったな……と、上条と命の大切さを正直二人とも本気で語り合う。

そうして仲間意識が湧いたのだった。

『太陽のアルカナランク2になりました』

何故かランクが2になった。

恐らく心が通じ合ったのであろう。

……何故か涙が出そうになった。

そうして、上条と話していたらついにインデックスが痺れを切らしたのか。

「とうまー!! お腹すいたっていつてるんだよー!!」

とキレた。

インデックスはビシッ! と公園に止まっているクレープ屋さんを指さし。

「見てよとうまー!! あそこにおいしそうなクレープ屋さんがあるんだよー!」

ここまで歩いてあそこに行かないなんて、そんなの拷問なんだよー!! シスター迫害なんだよー!!」

とインデックスは大声を出す。しかし上条はそんな流れに慣れているのか。

「インデックスさん? 今クレープを食べたら夕飯がモヤシどころじゃなくなってしまうんですが?」

夕飯がモヤシ所じゃなくなるという言葉が効いたのか、インデックスは「うー」と言いながら諦めた。

しかし、何か哀れと言うか、可哀想というか、見ていて食べさせなくなる。

こう、妹的感觉で。

「なあ上条、インデックスには俺が奢ろっか?」

そう言つと、インデックスが目をキラキラさせこちらを向く。  
凄くうれしそうだ。

それに、自然と俺は笑みがこぼれる。

しかし、上条は、

「いや、それは流石に悪い気がするんですが」

と、上条は遠慮する。

本当に別にいいけどな。

それに、

「いや、シャドウが落とした珍しいもので儲かったお金があるから大丈夫だよ」

「いや、でも……」

と、上条は遠慮する。

しかし、インデックスはまるでマリア像のように優しい顔で

「とうま、駄目だよ。主だって言ってるんだよ。施しは遠慮しちゃいけないって」

とインデックスは神様の言葉まで使つて説得する。

まあ上条は「ホントか？」と疑っていたが。

しかし、俺が上条の分も奢ってやる、というと、2分ほど逡巡した後「ほんとごめん」と簡単についてきたが。

「ありがとう総司」

と、インデックスは満面の笑顔でクレープを買う間の並び時間に  
言ってきた。  
すると

また世界が止まる。

目の前に現れたのやはりカード、アルカナは運命。

ふむ、しかし食べ物を奢ったくらいでここまで喜んでもらえるとは、  
良いことした気分だ。

そして世界が戻る。

「どうしたの？」

俺の顔が少し笑っていたのに気づいたのが、インデックスは顔を覗き込んでくる。

「いや、なんでもないよ。それより、そろそろ俺たちの番だインデックスは何食べる？」

そう言うと、インデックスはキングサイズのを注文した。

若干俺はヒイた。よくそんなに入るな……。

そして上条はインデックスのクレープを見て遠慮していたがちやんと奢ってやった。

「クレープおいしんだよ!！」

インデックスが口の周りを汚しながらクレープにかぶりついている。

俺はまだ3分の1も食べてないのにインデックスはすでに3分の2を食べつくしていた。

なんて速さだ。

「いや〜久々に上条さんはクレープなんて食べましたよ」

と、半分涙目で上条は感想を言った。

とりあえず上条たちを見て、上条に家にお金を入れなければと思った。

## 悩めよ若者

しかし、こつもたらだらしているわけにもいかない、今回の事件は前のはいささか違うようだからだ。

「なあ上条……そろそろ」

「ん、どうした？」

クレープを食べ終え、一段落した上条に提案する。

「大きなテレビってないか？」

そう言つと上条は俺が何を言いたいのか分かったのか、考え始める。

「ん……俺の知り合いにそんなやついない気がするな」

やはりそうか、花村の親がジュネスをやっていたのが運が良かっただけなのを改めて痛感した。

武器を持ち運ぶにもやはりテレビは大きい方が望ましい、さて、どうしようか。

手持ちの金で買おうか？ 金にはそれなり余裕もあるしな……。主にシャドウで稼いだ金だけどさ。そう思っていると

声をかけられた、俺ではなく上条にだが。

「どうしたんや上やん？ シスターさんと知らん男連れて。ハッ

！まさかついに男にまで手を……いやや、近づかんといて！！」

と関西弁を使う青い髪をし、ピアスをつけた男が現れた。

よし、こいつの名前は今俺の中で青髪ピアス、略して青ピに決定した。

そして次にもう一人の男、金髪のサングラスをした男が。

「どうしたんだにやー上やん？ そんなに悩んで、女の心配でもしていたのかにやー？」

と、二人とも上条の女の話をした。

上条は女泣かせなのか？

とりあえず俺も上条に注意しておこう。

「だめだぞ上条。女の子は繊細のよう……いや、それなりに図太いけどそれなりに繊細なんだ。あんまり女を泣かせるなよ」

と注意すると上条は金髪と青髪に、

「土御門、青ピ、お前らのせいで総司に勘違いされてんじゃねえか！

この不幸な上条さんが女の子にもてるはずがないでしょがー！」

と、上条が言うと、土御門と青ピと言われた奴らは苦虫を梔子ソバのように投げ込まれたかのような顔をし。

こちらに聞こえる丸聞こえの小声で、

「また上やんのあんなこと言っとなりますよどないします？」



「上やんだからにゃーもつどうにもならんぜよ」

「おい、お前ら丸聞こえだよ」

と上条のツツコミが入る。仲の良さそうな三人だ。

蚊帳の外のインデックスは先ほど食べたばかりなのに「またお腹すいたんだよ」と恐ろしい事を言っていたが。

上条達が土御門達を俺に紹介してくれた。

学校の友達らしい、土御門が「クラスの三バカ（デルタフォース）でもあるんですたい」

とかずつと気になっているおかしな口調でいっていた。

本人はただの口癖と言っていたが。

そしてしばらく三人で話していると、青髪ピアスが驚くことを言った。

「あー上やんこれから大型テレビ買いに行くんやけど持つの手伝ってくれへん？」

と、言い出したのだ。

俺と上条は顔を見合わせ青髪にどういうことだ？ と聞く。

「いやな、うちのパン屋のおやっさんが店の休憩室に置くらしんやわ、別に大型でも無くてええと思うんやけどな。」

しかもあれやで？ 宅配に使う金がもつたいないからって持ち帰れって言うんやもん本当人使いあらいい人やで」

と、青髪が言う、「なんてタイミングだ」と俺と上条そして蚊帳の外が嫌だったのかインデックスまで顔を見合わせる。

「ん？ どうしたんや上やん？」

青髪ピアスは不思議そうに聞いてくる。

俺は聞く。

「なあ、お前の所のパン屋は人の来なくなる時間帯はあるか？」

「ん？ あるで？ 大体昼の15時からあんまり来なくなるけどどないしたん？」

15時か、中の探索に使う時間はそんなに無いみたいだ。

しかし、上条達は初めて行くんだから初めの一回くらいなら短い探索でも大丈夫だな。

青髪の言葉にただ「大きなテレビを独占してみたくて」と返すと、「

たしかにそれはわかるな」と返された。

そんなに疑わない奴で助かった。

ちよつとバカっぽいけどいい奴そうだしな。

そうこうして、土御門達についてテレビを買いに行った。

買おうとしたテレビは予算オーバーだったので買えなくなりそうだったのだが、

俺と上条が女の店員さんと値引き交渉し予算が少し余るほどまけて買った。

土御門と青髪ピアスは何故か「上やんが二人に増えた!!」とかよく分からないことを言っていたが

まあそんなに気にすることでもないだろう

## トラブル発生

テレビを青髪の下宿しているパン屋に持ち込む。

そうして、ついに、時が来た。

テレビは15時頃なら好きに使って良いとの許可をもらい、上条と俺、

不安だが「絶対行くんだよ!!」と意地でもついて来るインデックスで行くことになった。

各自、武器を隠し持ってテレビの前に立つ。

上条はゴルフのアイアン、そして俺は最近まで使っていた武器より格段に弱くなってしまったが、釘付バット。

そしてインデックスは手ぶらだ。

何故かインデックスと上条は俺の武器を見て「うわぁ……」なんて声を出していたがどうしたんだ？

まあそんなことより俺達はテレビの前に立つ。

そして俺は上条達に言う。

「今から行くが、ペルソナのないお前たちは服を握ってくれ、そうすれば入れる」

上条とインデックスは俺の言葉に頷き二人とも俺の服をつかむ。

そうして、テレビに入ろうとした瞬間。

「上やん達だけで何面白そうなことしてるん？」

後ろから青髪が抱きついてき、出鼻を挫かれた俺たちはバランスを崩しそのまま一緒にテレビに突っ込んだ。

……正直、パン屋に下宿している青髪が来ることは予想できていたはずなのに、俺たちは焦って頭の中から忘却してしまっていた。

そうしてこのことが後に、俺に苦勞を強いることになる。

## 変態な暴風

豪風が吹き荒れる。

俺と上条、そしてインデックスは、目の前のシャドウに啞然としてその上で呆れた。

「ヒヤハハハハハハ！！！！ お前らモテ男を皆、皆滅ぼしてワイだけの王国を作るんや！！ 手始めに上やんと総司を殺してインデックちゃんをぺろぺろするんや！！」

インデックスはそれを聞き上条と俺の後ろに隠れ、上条は、

「青髪ピアス！ お前つてやつはどこまで馬鹿なんだ！！」

と、突っ込みを入れる。

なぜこうなったか説明するとなると、ほんの30分ほど前に遡ることになる。

30分前

テレビに入る時少し誤算があった。

それはいつも通りにテレビに入ってしまったことである。

クマの持っていたテレビが無いので落下してしまった。

「いたたた、アイアンがケツに食い込んだ!!」

そう上条が言うが、それはどんな状況なんだろう？

そう頭の隅で考えつつ俺は落下の衝撃で少し体を強く打ち、痛めてしまったので声を出せない。

インデックスは青髪ピアスの上に着地したらしく、大丈夫そうだが、青髪ピアスは 幸せそうに潰れていた。

特に問題はないようだ…………… ってやっぱりあった。

青髪ピアスだ。

「っ…………上条、どうする?」

肩を抑え立ち上がりながら上条に問うと、上条は尻を右手で押えながら渋い顔をする。

「どっするって…………どっする?」

「質問を質問で返されても困る」

「いやでもなあ、上条さんに助け求められてもこればかりは…

…」

流星に無理とは分かっているのだが、さて、

「なら、話のベクトルを変えよう、どう話す?」

と幸せそうに気絶している青髪ピアスに見て言う。

上条もうっん悩むが何も出て来ない。

どうするか悩んでいると、ふと、気付いた。そういえば霧が、俺たちの周りにだけない。

普段ここは霧で視界が覆い尽くされているはずで、クマのメガネが無いと何も見えないはずなんだが……。

「上条、俺たちの周りにだけ霧が無いぞ」

「ん？ 本当だな、どうしてだ？」

上条達も俺の話聞いて霧があることはすでに知っている。

「それにここ、クマがいたところとそっくりだ」

「そうなのか？」

「ああ、でも、テレビが無いから、別の場所かもしれない」

どうしてだろうと二人で不思議がっていると……。

「場所のことは分からないけど、この霧って、たぶん異能に近い霧なんじゃないかな？」

とさつき、青髪ピアスの上にしたインデックスが言う。

「異能に近い霧？」

そう俺が言うとインデックスは「うん」と可愛らしく小さく首を縦に振る。

「総司はアメノサギリを倒したんだよね？」



「ああ」と俺が言うとインデックスは語る。

「たぶんこれはアメノサギリの上位神が放つ霧なんじゃないかな？  
たぶんその上位神の漏れ出る魔力か、何かだと思っただけ……」

と、インデックスは歯切れを悪くする、

「……でも、でももつと何か私達に近い気もするんだよ……」

そう、何か不安に駆られるような声でインデックスは言った。

俺たちに近いとは、一体何なんだろうか……。

そう思っていると、

「んん……あれ？ 上ちゃん、どないしたん？」

そう言いながら気絶から覚める青髪ピアス。

やばい、忘れていた。

「か、上条……」

「いや、無理無理無理無理上条さんには無理です」

どうするか、どうすれば良い。

いつそのこと全てを言うか？

「で、あれ？ 二二二二二二や？ てか、何をしてたんや？」

青髪ピアスがきょろきょろと周りを見回す。

どうやらインデックスが青髪ピアスの上に乗ったせいで落下のダメージが大きく記憶が飛んでいるらしい。

これは好都合だ。

俺は上条と見合わせ、頷きあう。

「お前なんか急に倒れたみたいでな、俺達がおぶって病院に連れて行こうとしたら迷ったんだ」

いや、待てその言い訳はどうかと思うぞ!?

「そうなん？ それは助かったわ」

青髪はそれで考えることをやめたようだ。

よかった、あまり深く考えない人で。

いや、別に馬鹿って言ってるわけじゃないぞ？

「でも、ここどこなんやろな？」

カンカンと床を鳴らしながら青髪ピアスは自由に歩きだす。霧の向こう側などを見ようし、飽きてまた歩き出す。

「なんや、本当変な所やな、どこなんやろね？」

そんなことを言い青髪はしばらく歩くと急に足を止め、青髪は立ち尽くした。

上条はそんな青髪に気付かず、

「さ、さあ？ 意外に学園都市の暗部なんじゃねえの？」

だから待てと、それは色々とおかしいだろ。

そう言おうとすると、青髪は顔を青くしながら。

「……………なあ上やん、今の状況でそれは冗談にやらんで…」

「あん？」

「あ、あれ……………」

青髪。ピアスは前方に指を指す。

俺達は青髪の指が向いてる方向へと視線を移す。

そこで俺達は息を呑んだ。

そこには青髪。ピアスそっくりの、いや、そのままの存在がいた。

そうして、何処からともなく声が沸いて出る。

「あの青い髪のパラスの子モテないのに見栄張って鬱陶しいのよね、消えないかしら？」

「邪魔なんだから消えれば良いのに」と、声がわき出てくる。

「つっつっつと、どんどん、どんどん、沸いて出てくる。」

それに、上条は引きつるような顔で言う。

「な、なあこれって……………」

「ああ、俺が見てきたのとは少し勝手が違うようけど……………シヤド

ウだ」

そう言つと上条がゴクリと唾を呑むのが見えた。

「なんかいやな気分なんだよ……」

インデックスはこの声に不快の色を示している。

「な、なあ上やんに総司……これってなんやろ」そういえば見た？ さつき上条くんがかっこいい男の人連れていたの、青髪のピアスの方じゃなくて」

青髪の目がギンツ！ と開く。

そして目の前のシャドウも、同じように目を開いた。正直いろんな意味で怖い。

シャドウが語る。

「お前は女にモテへん」

シャドウの言葉に俺達は啞然とし、それに青髪が反論する  
目から血の涙を流しながら。

「そ、そんなことない!!」

「いや、自分でも分かっているはずや……俺はモテない、と」

「いやや、言わんといて!!」

「いい加減に受け入れ、二次元にばかり逃げへんで」

「お前に、何が分かるんや!!」

「分かるわ……お前は俺なんやから……受け入れ、お前はモテへん」

「違う、違う違う!! お前なんてワイやない!!」

そうして自分を否定した青髪のせいで、本格的にシャドウになってしまった。

正直、止めようにもあまりに馬鹿らしかったので、気が抜けていた。

「ヒヤハハハハ!! ありがとうなワイ!! これでワイの王国を作れる!! とりあえず総司と上条のモテ男コンビは死ぬ!! インデックスちゃんはワイとペロペロしようね!!」

こうして世にも奇妙な変態シャドウができてしまった流れである、俺も上条も声をそろえて言った。

『青髪ピアス! お前ってやつはどこまで馬鹿なんだ!!』

そうして勝負が始まった

## 戦闘開始

俺はシャドウの姿をまじまじと見る、頭が蛇、体は筋骨隆々と、不快になること極まりない姿だ。  
すると、突然豪風が吹き荒れる。

「ヒヤハハハツ！！ これでも喰らえやあ！！！」

シャドウは手から風を生み出し、それを投げつけようとする。

「皆下がれ！！ あれは強力な一ガル（風）系だ！」

俺が指示を飛ばすと同時に、上条は俺の指示とはま逆にそのままシャドウに突っ込んでいく。

何をやっているんだ。

そう言おうとした瞬間。

シャドウの手から、猛烈な、まるで竜巻のような風が上条を襲う。

「まずは一人目や！！！」

そう無慈悲に、蛇の顔をにやーとつり上げ、シャドウが言った。

上条は……風に飲み込まれた。

……俺は後悔した。

この戦闘に、この事件に、巻き込んでしまったことを。くそつ、全部、俺のせいだ……。

「くそつ！俺がいたのに……」

俺がそう悔むと、インデックスが言う。

優しそつに、微笑みながら、絶対の信頼を置くかのように。

「大丈夫だよ総司。とうまあの程度じゃ死なないんだよ」

ほら、とインデックスはシャドウの方に指を指す。

俺はまさか、と思い、あれほど強力なガル、ペルソナを持ってないと対処なんてしようが……。

そう思いながら指の差す方を向くと、そこには上条がいた。

腰を低くし、右手を前に突き出した恰好で。

「な……」

俺が啞然としていると、インデックスが言う。

「忘れたの総司？とうまの右手に何があるのか」

俺は昨日上条のマンションの部屋で聞いた話を思い出す。

『俺の右手はそれが異能であればそれが神の奇跡であろうと何だろつと、打ち消すことができるんだ』

そう、言っていた。

まさか、本当だったとは……。

それは、いくら超能力者がいる学園都市と云えど、いや、いるからこそその能力を侮辱するかのような力。

それはあまりに学園都市にそぐわなすぎて……、あの時の俺は信用しきれなかった話。

それは敵の、いや、敵味方問わずあらゆる異能を殺す右手。

それは、

「……幻想殺し」

俺は、そうつぶやいた。

その俺のつぶやきを聞いたインデックスは、可愛らしい笑顔で「そうなんだよ」とほほ笑んだ。

バキン！

まるでガラスが割れるような音がした。

空間を荒らしていた風が、突然消える。



シャドウは自分の攻撃が殺されたのを見て、恐怖でもしたのか、硬直する。

それを見た上条は、背をこちらに向けたまま、俺たちの方に小走りで走ってくる。

「なあ総司、シャドウは俺の幻想殺しで消えると思うか？」

上条が、俺の隣まで戻ってそう言った。

「いや、無理だと思う、あれは、ある意味一個の生命体だ。異能じゃない。だが、奴の出す攻撃は防げた」

俺は上条の右手を見てそう言う。

上条は何も言わず頷く。

体が熱い。

顔には出さないが、内心俺は興奮している。

上条は、ガルやブフ、ジオやアギなど放出系はきかない、そう、物理的な攻撃しか効かないのだ。

なら、一番攻撃力の高い、ペルソナを使える俺と放出系を消せる上条とでサポートしあえば、すごいことになる。

俺は、胸を高鳴らせ、そう思った。

## 戦闘了

「よし、上条！ 並走しろ！ 俺がペルソナを使う！ お前は放出系の異能を消せ！」

俺は、熱くなっただけでいく気持ちを抑え、荒い口調で上条にそう言う。

「ああ、分かった！ 総司！ 攻撃は任せたぞ！」

「ああ！ 任せろ！」

俺はそう言いながら、上条と一緒にタイミングで走り出す。

俺達は静かに、ガンガンと二人分の足音を地面に鳴らす。

まだシャドウは上条の幻想殺しに混乱しているのか、俺達が接近しているのに気付いていない。

よし、今ならいける！

「こい！」

こいつは、俺と、完二の友情のペルソナ、その名も……

「ペルソナアアア！！ オーディン！！！」

オーディン

そして現れる。

そいつは紫電を身に纏わせ、長き槍を持ちし青年が、俺の前に現

れた。

その手には、神々の戦争で活躍した『神槍グングニル』が。

そして、内に秘めしは圧倒的な力を持った戦神の力が。

その名は、北欧神話の最高神、オーディーン。

俺が何故こいつを呼び出したか、それは

「ジオダイーン!!」

目の前に、目を焼くほどの光と耳をつぶす激しい音が落ちた。

「ZUGYAAA  
AAAAAAAA」

耳をつんざく不快な声を発しながら、目の前の青ピのシャドウは、  
暴れ狂う。

予想通り風を使ってくる、奴の弱点は、電撃系だった。

「GYAAA」

シャドウは奇声を発したまま、しかし、正確にこちらの弱点のガ  
ル系、『ガルダイーン』を放ってくる。

しかし俺は、叫ぶ!!

「上条!! まかせた!!」

「おう!! 任せろ!! おらぁあぁあぁあ!!」

上条の右手が、ガルダインにぶち当たる。

上条の右手、つまり幻想殺しが『ガルダイン』にあたると、ガラスが割れるような音がし、そして消えた。

いや、正確に言うと殺された。

シャドウは、またも動揺し、その場に地団駄を踏む。

俺はその隙を逃すつもりはない。

だから、もう一度、シャドウが動けなくなるように俺は唱えた。

「ジオダインー!!」

もう一度目を焼くほどの光が落ち、その場に雷鳴をとどろかせる。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA」

シャドウは怨嗟の声にも似た奇声を発しながら……消えた。

「な、なんやったんや？ 今のは……」

青髪ピアスは、そう、呆然とした顔で、今の戦いの感想を漏らした。

「ええと……あれは……」

と、上条が青ピにどういう意味か説明しようとして、自分もよく分かっていないのか、説明しあぐねていた。

仕方なく、というより、元よりそのつもりだったが俺が青ピに説

明することにする。

それは、

シャドウのこと。

あれが自分の深層心理が思っている本音、本心であること。

そして、あれは青ピ自信が生み出したこと。

それを、分かりやすいように説明した。  
しかし、青ピは動揺しながらも。

「う、うそや!! そんな非科学的な……」

そんな動揺している青ピにもう一つ言う。

「動揺するのも分かる。だけど、あれを受け入れなければ、また、奴が出現する」

そう言うのと、青ピは、目に見えて顔を青ざめさせる。

手と、口を、目に見えて震わせながら青ピは顔を伏せる。

それに、上条は、大きく声を張り上げる。

「おい青ピ! お前が非科学的と言うのも分かる。

俺だって初めてあんなの見て、戸惑ってる。でも、確かに、見たんだろ?」

お前はその目で見たんだろ!! なら、もう否定するな!! 自

分を受け入れたくないからって逃げるな！！

お前がもし、自分を受け入れたくないがために、目の事を非科学的、なんて幻想に逃げるつもりなら。俺はその幻想をぶち殺す！！  
「」

そう、上条は青髪に怒る。

だけど……。

（受け入れるのはモテない自分なんだよな……上条も酷い事を言うな……）

俺はそう思って、上条を見た。

しかし、まああっさり青ピは上条の説教に騙されコロッと改心した。

なにか彼の言葉には魔術でもかかっているのだろうか……。  
しかし、そんな俺の考えを置いておいて、青髪は立ち上がる。  
そして、すがすがしい顔で言い放つ。

「ワイは確かにモテへんかった！！ この関西弁やって……注目されたいがためのエセ関西弁や！！」

……でも、ワイは次こそモテたるで！！ 次こそやるんや！！

やからシャドウ、ワイは、お前を受け入れる!!」

そう言うと、青髪の周りに青い光がゆらゆら集まり、さっきまで戦っていたシャドウが、姿を現す。

「ってなんや!? 襲ってきたんか!？」

と、青ピはシャドウに慌てるものの、すぐにそのシャドウは、光に包まれ姿を変えた。

「な、なんや? ……白銀のサメ?」

その姿は、白銀のサメ、なんのペルソナかは、俺の知っているペルソナには存在しない。

すると、今まで静かにしていたインデックスが、私の出番だと言わんばかりに、説明しだす。

「その白銀のサメはソロモン72柱の魔神の1柱で、序列30番の地獄の大侯爵の強力な神様なんだよ!!」

と、インデックスは、小さな胸を張って自信満々に言い放つ。

「? それはフォルネウス、なのか? 俺の知っている姿とは違うんだけど」

そう、俺が言うと、インデックスはより無い胸を張って言い放つ。

「この魔神は『召喚された際には、海の怪物の姿をとって現れる』と言われてるんだよ!! それに、ソロモンの魔神の中には

決まった形を持ったのと持っていないのがいるんだよ!! フォルネウスはその決まった形を持ってない魔神のうちに入るんだよ!!」

インデックスの説明に納得し、俺は青髪に言う。

「つまりそう言うことらしい」

「いや、よく分からへんねんけど……」

「それは俺もだ……」

俺はそう返した。

すると青髪は俺の言葉に「分からんのかい!?!」とつつこみ。

「ってかこの力はなんやの? 流石に超能力なんて野暮なことは言わへんけど……」

そう頭に?を浮かべる青髪に俺は簡潔に言う。

「ペルソナ」

「へ?」

「だからペルソナだ」

「えっと……ペルソナって何やの? 総ちゃん?」

「俺にも分からない」



「またかい!？」

と、そんな俺達の漫才に　やり取りに　上条は一度溜息をつ  
き、

「ってまあ、説明は後でもできるだろう、今はここからどつち  
て出るかが問題だと上条さんは思うのですが？」

そう言った。

確かにそうだ、さっさとここから出た方がいいだろう。

「ああそれなら、いつも通りにテレビから……………あ」

……………テレビが無かった。

そうだ、忘れていた。ここは、クマのいた場所じゃなかったんだ  
……………。

「……………」

「? どうした」

「……………」

「どうしたんや？」

「……………」

「おーい……………ってもしかして」

「っ……………」

「出方分からんとか？」

「ははは」

そう、俺が乾いた笑い声を出すと、青ピと上条、そしてインディックスが言う。

「出方わからんのか（の）い！？」

俺は、ゆっくりと首を上下させる。

すると、

『……………」

皆沈黙。

『……………」

やはり沈黙。

まるでお通夜のように暗すぎる雰囲気だ。

俺は、その暗すぎる雰囲気に耐えられず、口を開く。

「ごめん……………」

そう俺が言うと、青ピが今にも泣きそうな目で分けの分からないという顔で訴えてくる。

「お前がそんなこと言うたら本当に出られへんって思うやん!!  
やめてや!!」

ってか本当にここ何処やの!? 学園都市!? もうなんでもえ  
えからホンマ助けてえええええええ!!

さっさと出てお姉さんらをナンパしてきたいんや!! 彼女が  
欲しいんや!!」

そう青ピは、特に後半部分を魂をこめて叫ぶ。  
そして上条は青ピの後半部分にうんざりしながらも、自分も焦って  
いるはずなのに、青ピを落ち着かせるために、声をかける。

「おい、青ピ、落ち着けて。とりあえず、出口無いか調べよう  
ぜ? な? 総司もそれで良いだろ?」

そう上条が冷静に落ち着いて言う。

……ありがたい。

今の俺は、あり得ない失敗に動揺しまくっている、まともな判断  
ができる状態じゃない。

本当に……助かる。

……いや、でもまあ、落ち着いたところで出る方法なんて  
ないと思うのだが……。

そう俺は内心思いながらも、口には出さない。

というか出せない。出したい。でも出したら気まずいと三段活用  
で俺は胸の内を罪悪感でいっぱいにする。

しかし、その俺のそんな思いは、二秒後に激音と共に覆されることになる。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

そんな激音と共に、上空から大きな質量のモノが落ちてきた。

『は?』

俺達は、皆一斉に素っ頓狂な声をだす。

「えっと……何が起こったんでせうか?」

そう戸惑いながらも、変な口調で呟いたの上条。

そして、青ピとインデックス達は、呆然として何も喋れなくなり。

その中で一番驚いていたのは俺だった。

「は? え? テレビ? しかもクマのか?」

そう……俺は眩き。

その妙に古いテレビを見るために俺は近づく。

すると、テレビがブンという音と共に、何かが映しだされた。

「うおっ!」

そんな声を出したのは誰だろうか、もしくは自分かもしれない。しかし、そんな声が出るのも仕方が無い。

何故なら、急に映し出されたテレビに映し出されていたのは、生氣を失った、見たこともない片目を髪で隠した少年だったから。

少年は、生氣のない、しかし、何故か神々しいまでの雰囲気纏っていて、一言、言う。

君は、この事件の真相を、かつてのように探せ

こころも自由に使え。

そう言ってテレビは音もなく電源が落ちた。

気付くと……いつの間にか元のパン屋のテレビの前に立っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7507u/>

---

とある魔術と仮面使い

2011年10月8日23時22分発行